

## 黄身×白身

ぼた

円や球体は完全を表すのだとどこかで訊いたことがある。もし本当にそうなら、わたしこそが完全で、彼女は不完全。

鶏卵の多分に漏れず、生まれたての黄身は丸い。重力の意地悪にも負けずに張りを保って、わたしは完全な球を保っている。

業務用冷蔵庫の中は完璧な4℃。水も一番重くなるほどの冷気。この箱のエアコンプレッサは快適だ。

わたしたちは死んだ卵。精の無いままで生まれ、そして食べられて消費されるだけの存在。

でも、どんな存在だつて結局、要約してしまえばそれに尽きるのだとわたしは知っている。ヒトであれ動物であれ、食い物にされ、消費され、やがて死んでいくのだ。誰かに食べられ役に立ったのならそれだけで幸福なはずなのだ。

本当に、食べられるのならね。

「ねー、キミちゃん、何考えてはるのん？」

「うるさいわね、シロ。ちょっと良いところなんだから黙りなさいよ」

わたしの周りでふよふよと揺れてとどまらないのが白身。

硬質な殻に包まれて、一体となっている。

「キミちゃん賢いからにやー。うちには全然わからんわ。なんか決まったら教えてえ」

外界から伝わってくる僅かな温度変化に動かされて、白身はわたしの周りを流れる。僅かな隙間さえ許されないぐらいに狭い炭酸カルシウムの壁の中で、わたしたちはびったりと寄り添っている。

生まれたときから、この子とは一緒だ。それが恨めしくもあり、そして同時に嬉しくもあるのは、奇妙な感情だろうか。他の誰かにとってはそうかもしれない。でも、わたしたちにとっては自然なことなのだ。

双子の姉妹みたいに、わたしたちは一緒にいる。もとは同じ生き物なのだ。完全なわたしだけでは、世界は変化しない。不完全な彼女だけでは世界は始まらない。わたしたちが共に存在するから、鳥は生まれ、世界は流動しつづけるのだ。

「ほいでも、そんなに難しいこと考えとつたら貧血にならひんのん？　うちみたいに真つ白くなつちやつたらやあよ」  
「なるもんですか」

つん、と膜をひときわ固くして、わたしは答えた。暗い冷蔵庫と殻に包まれていては分からないけれど、わたしは美しい金色の黄身なのだ。自分で見たことはないけれど、魂で知っている。

……それに。

「キミちゃん綺麗やもん。うちみたいなぶよぶよのおぼけとは違うわあ」

「ッー」

また始まった。白身の褒め殺し。

「やつ、止めてよ。見たことないんでしょー」

「見なくてもわかるわあ。お肌つやつややし。ぷりっとして、ぶるぶるっとして、ちよつと硬いぐらいのが可愛いんちゃうのん？ お天道様と比べても負けなぐらいのぴかぴか金色やし。えへへ、キミちゃんにさわると幸せになる」

そして白身はすりすりそばにすり寄ってきた。中の色素成分が急上昇するのを感じる。どれだけ褒められても慣れない。い。

思わず反論する。

「なつ、何よ、あんただって、あんただって！」

透明で柔らかくて、いつもわたしのこと守ってくれてるじゃない。外の暑いのか寒いのか全部受け止めてくれるじゃないの。透明で澄んでいて。

大事な、だいいじな、わたしの半身。

「やあんキミちゃん。照れるやないの、もー」

えへえへと笑って、それから白身は身を少しこわばらせた。

何かを警戒しているみたいだった。

「どうしたの？」

「ん。なんか、ね」

白身は少しだけ気まずい感じで、殻の内側をひっかいた。

「誰にも食べられないって、さみしいね」

「そうね」

生まれ落ちて、まだほかほかと湯気を立てていたあのころ、わたしたちは自分の運命を知らなかった。居心地の良いわらのベッドから取り出され、シールを貼られて冷蔵庫の中に入って、周りの卵たちから自分たちの運命を聞いていった。透明なケースに入った一ダースの仲間たちは、順番に取り出され、今はもういない。

わたしたちは生まれない。

だから黄身であるわたしが白身を食べて大きくなり、一匹の鳥の雛になるような恐ろしいことは起こらなくてすむ。ずっとわたしたちは共に過ごすことが出来る。

けれど誰にも食べられないままなら、わたしたちは自分の一生を終われない。

それはとても恐ろしいことのように思えた。その先にあるものが全く想像できなくて、とてもとても怖かった。

このまま誰にも必要とされずに過ごしていくのだろうか。ただ水分を失って少しずつわくちやの腐敗したタンパク質の名残になってしまおうのだろうか。

ただ心配で、心配で……たまらなかつた。

「キミちゃん、ふるえるのん？」

「そんなことっ、ない！」

「大丈夫よ。うちがいてる」

白身はふわりとわたしの周りを包み込むと、拍動するように膜の周りを揺らした。

「数を数えるんよ。ゆーっくり」

「ん」

とくん、何かが震える音がした。

「キミちゃんはホントは鳥になれたぐらいに賢くてきれいやから、いろいろ考えて、訳分からんようになるんやろうけど、それが出来たら大丈夫になるわ」

「ええ。わかったわ」

その静かな振動。冷蔵庫の硬いびつな低周波とは違う、生き物の穏やかな胎動。それにただ癒されている。

この子がいるから、わたしは安心して存在することが出来るのだ。この子がいなくなったらきつとわたしはぐしゃぐしゃにつぶれてしまつて、重力にすら耐えきれないだろう。

と、白身が不吉なことをつぶやいた。

「きつと、うちがそばにおらんようになってでも大丈夫ね」

「なんで、そんなこと言うのよっ！」

たったそれだけの言葉で、今にも泣きそうさ。どうしてこんなことで泣きそうになるんだろう。ずっと一緒だったから、ずっとそばにいたから、ずっと安心していたから。

当たり前前の優しさが、いつか離れてしまうことを予感していたから。

「だって、」

そして、冷蔵庫の扉はおもむろに開いた。

いつか、殻は割られる運命だったのだ。

「キミちゃんのこと、好きやったで」

誰もがずっと卵であり続けることは出来ない。

雛になる者も、卵焼きになる者もいる。

わたしたちの運命は、すぐそばに控えていたのだ。

明るいとところに放り出されて、わたしは目が回りそうだった。ぐるぐると回転されてお手玉されて、上機嫌なコックの手の中で卵は宙を舞うようだった。実際三センチぐらいは浮いていたかもしれない。ひよいひよといかにも気軽に殻は割られた。そうしてボウルの角にぶつけられる。クラック、クラック。わたしたちの大切な家は碎けた。あつけなくただの白い生ゴミになった。

「さよなら、キミちゃん」

いかにもたいしたことないみたいに、ずるりと白身は落ちていった。痛くなんてない、さみしくなんてない。これらはいつか決まっていたことだから。別れはいつでも唐突で残酷で、何でもないことのように恋人たちの間を裂くものだから。

わたしだけが取り残された。間抜けな殻の残骸にへばりつくみたいにして震えていた。好きでそうしていたんじゃない。ふるふるで、少し硬い黄身だから、そうやってトラップされ

ている。コックの手の内でただされるがままに分かたれる。運命の半身を地に蹴落として、わたしだけがただ上にいる。

コックはいつだって上機嫌だ。きれいに割れたのが嬉しいんだろう。そうだ、神様はいつだって上機嫌だ。運命を手の内に行っているから。誰のどんな悲しみがその中にあるかなんて知った事じゃない。全ての事柄が自分の思い通りになればただそれだけでいいのだ。

目まぐるしく世界は円転する。回転する。べちゃりと軽い音を立てて小さなガラスの容器に入れられて私はほうつておかれる。明るいキッチンの蛍光灯の下で、わたしは初めて自分の姿を認める。歪んだ壁面に写った黄身は、どことなくくたびれて年老いた、ただの古びた卵だった。白身がほめてくれたような良いところはほとんど消え失せて、ただ退廃と老化が艶のない膜に滞っていた。真夏の太陽やひまわりというよりは、寝ぼけた色のスーパーボールぐらいがせいぜいだった。それでもゆつくりと水気が飛んで膜はしわを寄せていくようだった。

遠くで不吉なモーターの音がする。冷蔵庫よりも剣呑で暴力的な音波が響く。鉄臭い匂い。ねじ曲がった凶器。がりがりとボウルを削り取るみたいな音がする。その中で、嫌な音が、聞きたくもない嫌な音が。

ぴちゃり、

ぴちゃりと、

水音が。

抵抗なくかき混ぜられ、泡立てられるだけの、音が。

「……嫌」

拒絶は通じない。それはもうすでに為されている。運命は一つの卵を引き裂くだけじゃなかった。かけがえのない半身を二目と見られないような凄惨な姿に変えてしまうのだ。

「いや、嫌、イヤ、いやああああ……！」

絶叫が、届くわけもなかった。それは音波にはならない。かき消される。無骨なただの鉄のローターにかき消される。乾いたボウルが乾いた鉄に触れて、感覚の全てを痺れるような音を立てる。きな臭いようなオイルモーターの匂いと共に、確実な別れが訪れた。

けれど泣いている暇はなかった。そんな水分もなかった。わたしには何も無いのだ。醜く年老いてしまった自分自身以外には何も。

わたしは持ち上げられ、ただ重力に導かれるままに、別のボウルへと落ちた。ただその重みだけで、自重だけでただ膜はあつけなく破れた。

白身が、いつも大切にしてくれたのにな。

あつけない終わりだと思った。

でもそれは、悪夢の始まりでしかなかった。

鏡面のようにきれいなボウルの中で、ぐじゅぐじゅと冷た

鉄の針金でこじ開けられる。己の中のどろどろとしたところをこれでもかと思せつけられる。自分は綺麗などではなかった。ただのタンパク質や脂肪を含んだ細胞の溶液でしかなかったのだ。思い知らされる。

自分は、汚い泥のような存在なのだ。

鳥になって飛べるはずだったのに、ありがとうと白身は言った。一緒にいてくれてありがとうと彼女は言った。

そんなことは、ないよ。

あんたがいたからだよ。

ちゃんと一緒にいるうちに言っておいてあげればよかった。でももう彼女はいない。いなくなってしまった。

とろとろと鬱陶しいぐらいの遅さでハンドミキサーは回る。上から白いだけの幸せの偽物を振りかけられる。重い。こいつらは……違う。

「うっひゃー、卵の中とかマジありえないってゆーかあ、くっさいしじめじめしてるし、たまんない」

軽薄な上白糖。小粒なくせに結晶は硬い。グルコースの固まりがなければしの水分を吸い込んでいく。もったりと重くなっていく。

「あんた湿っぽい。こんなのやってらんない」

「言ってれば。どうせ、あんただって同じボウルの中にいるのよ。誰も逃げられない」

ただ暗い気持ちで答えた。白いだけで、こいつらは違う存

在だ。彼女とは似ても似つかない。一緒になることなんて、自分の矜持が許さない。

それでも、ただ混ぜられていくうちに、彼女たちもわたしもばらけていく。砂糖の結晶に黄身がしみ通って入り込んでいく。自分の中の自分が、少しずつ溶かされていく。味付けがされていく。共にいるというだけで、染まっていってしまう。

彼女は、けしてそうしなかった。

ただ優しく包み込んでくれていただけだ。混ざろうとはしなかった。

わたしを、わたしのままで愛してくれていた。

彼女のそんな優しさが、恋しかった。

もたり、もたりと重い体が打ち付けられるのはボウルの壁面。さらに油っこいバターが混ざってきて、自分が自分ではなくなっていくのを着実に感じる。何も考えたなくなるぐらいに、この世が地獄であることを実感する。熱い。融けた油脂分がべったりとのしかかって、窒息しそうに暑苦しい。この場所に安らぎはない。延々かき混ぜられて、発狂しそうなぐらいに動き続けて休む暇なんて与えられない。

「う、お、ふ、でる、だ、ふ、ちが」

無塩バターはもう、初めから溶かされて、自分の中の尊厳を全て失ってしまったみたいだった。吐息を漏らすみたいに、音を立ててされるがままになっている。きつと冷蔵庫の中に

いたときは凜として四角を保っていたはずなのに、一緒に混ぜられたサラダ油ともう解け合ってしまったって見る影もない。熱は全てを侵して、元とは違う柔らかな泥濘に変えさせてしまう。砂糖を溶かしてボウルの中をどろどろの黄色いだけのクリームに変えてしまう。わたしはもうわたしが何だったのかも、判らなくなってしまう。

望んでいたはずの水気を足されても、もうわたしだった場所とわたしではなかった場所が判らなくなるぐらいに混ぜられてしまつては、どうにもならない。

甘つたるいバニラエッセンスの香りが、とどめを刺すようにして、茶色のシミを作つた。

「たふ、とふ、てう、たう」

また、白い者が降りてくる。よくふるわれた小麦粉が、アーモンドパウダーと混ぜつて舞い降りて降り積もつていく。細やかなその肌が、わたしに黄色く汚されていく。

「……しろい、わ」

白くなつていく。わたしはいつか分かれた半身のように白くなつていく。でもそれは誰だつたろうか。それも判らなくなりそうなぐらいに、また、混ぜられる。だふり、白い粉が舞上げられて、そしてすぐに落ちる。

その白い全てを飲み込んで、わたしはまだ、黄色いままだった。原初の黄金は見る影もない。ただ薄黄色く重く、ただ淀んで重い。

白い者はいなくなる運命なのだろう。すぐに汚されて、いなくなつてしまふんだ。わたしの中に全て吸い込まれてしまった。

そんなことはけして望まなかつたはずなのに、世界がわたしをもてあそぶ。

わたしはただ、ずっと、白身と一緒にいたかつた。それだけだつた。誰かに必要とされたかつたのは確かだけれど、本当は彼女と一緒になら、生ゴミに捨てられたところで構わなかつたのだ。

二度と会えないのだと思うと、自分の中の水気がじわじわと偏つてしまふ気がした。あれだけしつかり混ぜつたはずなのに、どうにも分離してしまつて仕方がなかつた。

元は液体の自分と、固体の小麦粉とで、混じり合えないのは仕方のないことなのかもしれないなかつた。

「つ……！」

また、白い者が降りてくる。けれど、違う。感触が違う。

「やわら、かい？」

懐かしい、けれど、前とは違う。初めてなのに、どこかで触れたことがあるような気がした。

「ひさびさやね」

会えないはずの彼女だつた。

けれど記憶の中の彼女とは違う。ただ覆い被さるだけで包み込んでくれない。ざつくりとごく軽く混ぜられるだけ

で、完全に一体にはならない。

「シロ……？」

昔みたいに、ぎゅってしてほしいのに。

「何だか、遠いよ」

さみしいよ、ぼつり落とした言葉は焼き型の中にゆらゆらたゆたって沈んでいった。

白身は、静かにただ優しく、言い聞かせるように言った。

「あかんで、キミちゃん。ひつついたら」

「何だよ！ ねえっ！」

どうして、混ざってはくれないのか。

どうして、まったく同じものになつてはくれないのか。

「つぶれるから」

彼女は、またいつものように笑っていた。どんなことがあるても、わたしを包み込んでくれる白身。

彼女は言った。

「ふくらむんよ、雲みたいに」

泡みたいに。

綿みたいに。

夢みたいに。

二人きりの、夢みたいに。

「うち、変わるんや」

もつと強く。もつと守れるように。

地獄の釜のふたが聞く音がした。熱気がむわつと広がる。

オーヴンの温度は百八十度。完全な焼き上がりまで三千秒。

ごくゆるく混ざったままで、わたしたちの邂逅は終わる。

あとはただ、食べやすいように、消化されやすいように、加熱されるだけ。

長い沈黙が、うねりを帯びたオーヴンのなかに響いていた。ただ厳かな通奏低音のように、鑄鉄で出来た地獄の中を埋めていた。

少しずつ自分の中へ熱が込められていく。熱気に触れてかたくなになつていくのが判る。すぐそばで、彼女がゆつくりと膨張していく。

「キミちゃんも、変わったでしょ」

「ええ」

わたしは汚れてしまった。ただ粘りけと重さだけが増して、昔のようにただ太陽のような黄色さはなくなつて。

白いものが混ざつたのに、あなたのように白くはなれなかった。

お互いの距離は遠いままで、焙られるオーブンの火があかくあかく、世界を埋めていく。熱さがお互いを少しずつ変えていくのがわかった。決定的に違う者になつていくのに、すぐそばにいる。再びわたしたちは一つのものになるのだろうか。「いなくなっちゃうんだと、思つてた」

だから、覚悟したのに。どれだけ白く汚されても、あなたがほめてくれた幻の黄金色きんいろだけは、なくさないようにつて。

「うちも、寂しかったわ。キミちゃんがいなくて」

だから、覚悟したのだと彼女は言った。

どれだけかき回されても、硬く硬く自分の中に空気を抱き込んで、殻を作って。柔らかく包みこむことができなくても、その透明さだけはなくさないようにって。

熱をはらんで、白身はふくらんでいく。わたしたちを抱き込んだメレンゲが膨張して、汚らわしい甘さも、厭わしい脂肪も、全部全部包み込んでいく。

本当に優しい彼女だった。

姿形が変わっても、あなたはあんなのままだった。

「好きよ」

「こそばいなあ。照れるわあ」

白身はふくふくとわらった。タンパク質分子が鎖状にからみあって、大気を抱き込んで、わたしたちを巻き込んで、どんどんふくらんでいく。

「うちもキミちゃん好き。甘くなって、ちよつと太ったけど、それでも好きやで」

「……ふとつてないもん」

「ちよつと脂っこいのも好きやで」

「うっさい、ばか」

「砂糖がちゃんと溶けてないんちゃう、なんかちくちくする」  
「そんなことない。甘くなっただけよ」

熱いオーヴンがバニラの香りで満たされている。しっとり

とした水気を抱いたままで、表面が薄茶に焦がされていく。

「変わっても、一緒よ」

食べられて亡くなってしまいうまで。

ずっとずっと一緒にいよう。

教会の鐘のように、焼き上がりを知らせるオーブンのベルがなった。